



『天の御国が近づいた』—献身— (要旨)

聖書箇所：マタイ 10:29-42

【1】 中立ではられない

イエスは、ご自分の弟子たちに「わたしは、平和ではなく剣をもたらすために来ました」(34)と覚悟を促しました。ここで言う「剣をもたらすため」とは、イエスが来られた目的ではありません。むしろその結果です。イエスの発することばには、人間の内部を刺し通す鋭さがあるからです(参照:ヘブル 4:12)。それを受け入れる者とそうでない者の間を刺し通します。そのため、本来最も身近で心の支えである「家の者たちがその人の敵となる」(36)と予告しました。私たちにとって、父や母、息子や娘との関わりは重要です。

「個人的にはイエスの教えに同意している。しかし家族とは敵対したくない。」そう考えるのは自然です。イエスは、皆に受け入れられる道を探し求めている者たちに問われます。あなたの人生の中心にいるのは誰かと。「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません」(37)。イエスは、ご自分に従おうとする弟子たちに、人が自然に抱く愛着を超えた愛と従順を求めたのでした。

【2】 十字架を負って従う

「自分の十字架を負ってわたしに従って来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません」(38)

ここで言う十字架は重荷を意味します。美しく輝くアクセサリではありません。さらに十字架は死の象徴でもあります。トマス・アケンピスの言葉が重く響きます。「今やイエスの天国をしたう者は多い。しかしその十字架をになう者は少ない。イエスから慰めを望む者は多い。しかし苦難を望む者は少ない」(トマス・アケンピス『キリストにならいて』)

イエスの十字架を負うとは、イエスの後に一歩一歩ついて行くことです。自分自身をイエスに明け渡し続ける—譲り続ける—ことです。イエスは、そのような者が真の弟子であると言われました。「あなたがたがキリストのために受けた恵みは、キリストを信じることだけでなく、キリストのために苦しむことでもあるのです。」(ピロ 1:29)

【3】 自分に死ぬ時にいのちを得る

イエスがご自分の弟子たちに求めたことは、勇敢かつ雄弁であることではありませんでした。自分に死ぬことでした。「自分のいのちを得る者はそれを失い、わたしのために自分のいのちを失う者は、それを得るのです。」(マタイ 10:39) E.ピーターソンは次のように意識します。「あなたの第一の関心が自分である時、あなたは自分を見出すことができない。でも自分のことを忘れて、わたし(イエス)から目を離さなければ、あなたは自分もわたし(イエス)も見出すことができる」(Eugene H. Peterson, *The Message*)

罪ある人間の生まれ持った性質は、自己中心です。自分が成功することや自分が利益を得ることを追求します。それに対して、イエスは自己中心から神中心の生き方への方向転換を求めました。そしてそれこそが、自分とイエス、両者を得る手段なのだとされたのです。

「キリスト・イエス、わたしたちは、喜びの日にも苦悩の日にも、あなたの泉に近づきたいのです。そして、あなたが聖霊によって語られるその声に、わたしたちは耳を傾け、あなたの愛に満たされ、人々に寄り添って日々を生きていくのです。」(ブザー・オブジェ『信頼への旅』)